

「隣に越してきたの、
偶然だと思う？」別れ
た元カレが隣室に住ん
でいて合鍵で毎晩カン
トに侵入されて「お前
の身体、まだ俺の形し
てるよ」と壁一枚の距
離で五回中出しされて
完全に堕ちた話

「……ん、っ……」

意識が浮上するより先に、腰がびくんと跳ねた。股の間に、何かがいる。指——知っている指。関節の硬さ、爪の形、中を探る角度。全部、覚えている。

「っ……え……？」

暗い。カーテンの隙間から街灯の光がひと筋だけ差して、天井を斜めに切っている。見慣れない天井。今日引っ越したばかりの部屋。時計の光——午前二時。

押し掛かるように上に乗っている影。

シダーウッドとベルガモットの香水。三ヶ月経っても鼻腔にこびりついて消えなかった匂い。

「——蓮……っ」

「起きた？」

低い声が耳朶を舐めるように落ちてきた。暗がりの中、氷室蓮の顔がすぐ近くにある。切れ長の目が、街灯の光を拾って鈍く光っていた。

「なっ、なんで……鍵、かけた……」

「合鍵。引っ越す前に型取っという」

蓮の指がカントの中でくになり、と曲がる。内壁を押し広げて、かつて何十回となく責められた場所を——正確に、擦った。

「ひ、あっ……♡」

身体が勝手に反応する。カントがきゅう、と指を締め付けて、奥からじわりと蜜が滲んだ。

（三ヶ月……誰にも触らせてない……自分でも触れなかったのに、蓮の指が入った瞬間、昨日の続きみたいに濡れてく……っ♡）

「三ヶ月触ってないのに、こんなぐちょぐちょ」

蓮の声に嘲りはない。確認するような、当然の事実を読み上げるような平坦さ。それが余計に湊の羞恥を抉った。

「やめ、て……もう別れたのに……っ」

手首をまとめて掴まれる。片手で頭上に押さえつけられた。蓮の手は大きい。湊の両手首なんか簡単に収まってしまう。交際中、何度もこうされた。その感触まで覚えている自分の身体が憎い。

「別れたのはお前の気持ちだろ。お前の身体は別れてない」

指が引き抜かれた。ぬちゃ、と粘度の高い水音がして、蓮が自分の指を湊の唇に押し当てる。

——やめて。それ知ってる。いつもこうされた。自分の味を、舌の上に塗りつけられて。

「ぐっ……♡」

指が口に入り込む。甘くて、少しだけ塩辛い。自分のカントの味。蓮がいつも「いい匂い」と言って舐めていた場所の味。

「覚えてるだろ。俺がいつも舐めさせてた味」

覚えている。身体が覚えている。舌が条件反射で指に絡みつき、それを自覚して、背筋が凍った。

蓮がベルトを外す。暗闘の中でジッパーの金属音。布が擦れる。

「三ヶ月分、今日全部返してもらう」

「や、だ……っ」

声が震えた。拒絶の言葉なのに、カントからはとろりと蜜が溢れて太腿の内側を伝っている。

(嫌って言ってるのに……なんでこんなに濡れてるの……っ♡ やだ、身体が蓮を覚えすぎてる……♡)

硬く勃った先端がカントの入り口に触れた。

ぞく、と背筋を稲妻が走る。

——この形を、知っている。

先端のカロの張り出し方、少し左に反った角度、幹の太さ。三ヶ月間、何も入れていなかったのに、蓮のそれが触れた瞬間、花卉がほどけるように入り口が開いた。

「見ろよ、まだ俺の形に開く」

ずぶ、と先端が沈む。

「あ……っ、は、いって……くる……♡」

痛みはなかった。三ヶ月ぶりなのに。蜜が潤滑油になって、蓮の肉棒を奥へ奥へと導いていく。

（自分のカントが……自分の意思に反して蓮を招き入れて
る……嫌なのに、中がこんなに嬉しそうに開いて……っ♡）
——嫌だ。こんなの、嫌だ。男なのに。カントなんか持って
生まれたくなかった。なのに——

ずんっ——

根元まで一息に埋められた。先端が子宮口にぶつかり、湊
の背中が弓なりに反る。

「っい、あ……っ♡♡ おく、当たっ——」

「ここだろ。お前が一番壊れる場所」

知っている。蓮は全部知っている。子宮口の少し手前、斜
め上に突き上げると湊の理性が千切れること。左より右の乳
首が三倍感じること。耳の後ろに息を吹きかけるとカントが
勝手に濡れ出すこと。一年半かけて蓮が開発した身体の地図。

蓮が腰を引いた。

——来る。

叩きつけるように、突き上げる。

ぐちゅっ♡

「あっ♡♡ そこ、だめ、そこ知ってるく、せに……っ♡」

卑猥な水音が暗い寝室に弾けた。カントから溢れた蜜が、
蓮が突き入れるたびに白い泡になって結合部に溜まる。ベッ
ドの軋み。肉が打ち合う音。湊自身の抑えきれない声。

（やだ……感じてる……蓮に犯されてるのに、カントが喜んで締め付けてる……♡ 三ヶ月ぶりの蓮のおちんぽが、こんなに嬉しいなんて……認めたくないのに……っ♡♡）

ずちゅ、ずちゅ、ずちゅっ——

同じ場所を、正確に、何度も。子宮口の斜め手前を抉るように突く角度。元カレだからできる、身体を知り尽くした責め。

「おおっ♡♡ むりっ、そこばかり突かないで……っ♡♡」

「三ヶ月分の利子、カントで払え」

蓮の手が湊の胸に伸びた。Tシャツ越しに、右の乳首を。——左じゃない。左より三倍感じる右を、的確に指先で捻り上げる。

「ひぎいっ♡♡♡ イっ——イっちゃ、う……っ♡♡」

視界が白く弾ける。カントが痙攣して蓮の肉棒を万力のようにはじめ上げ、奥からぶしゅっ♡と蜜が噴き出してシーツを汚した。

（だめっ、イッてる、蓮なので——男にカント犯されてイッてる——っ♡♡ 一発目からこんなに深く——三ヶ月、ずっとこのおちんぽが欲しかったみたいで——♡♡）

蓮は止まらなかった。痙攣するカントの中で腰を突き出し、そのまま奥に押し込んで、子宮口に先端を密着させる。

「中に出す。お前のカント、俺の精子で埋めてやる」

「やだっ、中はだめ……っ」

どくっ、どくっ——

脈打つように精液が注ぎ込まれた。子宮口に直接。熱い液体がカントの最奥を満たしていく感覚に、湊はシーツを掻きむしって声にならない悲鳴を上げる。

「あ、あ……♡♡ なか、熱い……出てるの、わかる……♡♡」

蓮は抜かない。深く埋めたまま、湊の耳の後ろに、ふっと息を吹きかけた。

——そのスイッチを、押すな。

遅かった。耳に息がかかった瞬間、絶頂の余韻で過敏になっていたカントがびくんっ♡と跳ね、きゅうっと蓮を締め直す。中に出されたばかりの精液が、締め付けで逆流して結合部から溢れ出した。

「ほら、まだ欲しがってる」

「ちが……っ、これは、勝手に——」

「自分から締めといて『勝手に』は通じねえよ」

蓮の肉棒が、抜かれないまま再び熱を帯びていく。硬さを取り戻していくのがカントの中で分かって、湊は目を見開いた。

「うそ、でしょ……もう——」

「まだ始まったばかりだよ」

蓮が湊の身体を起こした。精液が溜まったカントに肉棒を埋めたまま、自分の上に座らせる。騎乗位。重力で、さっき注がれた精液がカントの奥から入り口へじわりと下りてくる。どろ、と溢れた白い液体が蓮の腹に落ちた。

「自分で動け」

「……っ、やだ……」

「動かないなら、壁の向こうに聞こえるくらいの声出させるけど」

壁一枚向こうは隣室——蓮の部屋。その更に向こうにも住人がいる。深夜二時。この壁の薄さで——

（聞こえたら……カントを犯されてるって……男なのに元カレにカント開いてるって……っ♡）

湊は屈辱で唇を噛みながら、腰を持ち上げた。

ずる、と肉棒が抜けかけて、精液混じりの蜜がとろりと太腿を伝う。腰を落とす。ぬちゅっ♡——再び根元まで埋まる。

「う、ん……っ♡」

「声殺してんの可愛いけど、意味ねえよ。カントの音が壁に響いてるから」

ぐちゅ、ぐちゅ、じゅぷっ♡——

騎乗位で湊が腰を上下させるたびに、精液と蜜が混ざり合った水音が鳴る。一回戦で注がれた精液がぐちゃぐちゃにかき回されて、どこまでが蜜でどこからが精液か分からない。

「ひっ……♡♡ やだ、音、止まらな……」

「止まるわけねえだろ、こんだけ濡らしといて」

蓮が下から腰を突き上げた。湊が自分で探し当てていた角度とは違う——奥の壁を直接叩く、深い角度。

「あっ♡♡♡ それっ——そこ初めて……知らない……っ♡♡」

「元カレじゃねえ。現カレだ。お前が勝手に別れたつもりになってるだけ」

（……っ、なんでそういうこと言うの……カントがきゅってなるからやめて……♡♡）

蓮の両手が湊の腰骨を掴む。上下に動かし始める。湊の意思とは関係なく、蓮のペースで貫かれる。騎乗位で上にいるのに、主導権は完全に蓮のもの。

ずぶっ、ずぶっ、ずぶっ♡——

「ひうっ♡♡ あ、ああ……っ♡♡ おくが、ぐちゃぐちゃに、な……っ♡♡」

カントの中は一回戦の精液でぬめぬめに滑っている。その中を肉棒が暴れ回り、精液が泡立って白い飛沫になって結合部から零れ、蓮の腹筋を濡らした。

（騎乗位って……自分から犯されにいったるみたい……嫌なのに、カントが離したくないって叫んでる——嫌、そんなの認めたくない……っ♡♡）

蓮が上体を起こす。座位。密着度が一気に上がった。湊の身体が蓮に抱きすくめられる格好になり、耳元で低い声が囁く。

「なあ湊。なんで逃げたの」

「……っ、カントが……バレたから……」

「バレたから何？ 俺が気持ち悪がると思った？」

「……普通、は……男のくせにカントがあるなんて……っ」

「普通じゃないから最高なんだろ」

ずん♡——奥を突き上げられた。子宮口を叩く振動が背骨を駆け上がって、脳天を貫く。

「お前のカントは俺のために存在してる。他の誰にも使わせない」

——その言葉が、一番深い場所に刺さった。

（嬉しい……のか、これ……男にカントを独占されて、嬉しいって思ってる自分が怖い……♡♡）

カントが蓮を締め付けて、蜜が溢れて、涙が出た。

「おおっ♡♡ れ、蓮、もうだめ、またイ——♡♡♡」

「イけ。俺のおちんぼでイけ」

二度目の絶頂がカントを貫いた。びくびくと激しく痙攣して、精液混じりの蜜がぶしゅっ♡♡と結合部から噴き出す。蓮もそのまま腰を押し込み、一回目より重い射精。子宮に直接注がれる精液の量が、さっきより多い。

「……っ、あ……なかに、また……いっぱい……♡♡♡」

湊が蓮に崩れ落ちた。汗で滑る肌と肌がぺたりと貼りつく。蓮の肩に顔を埋めて、ぼろぼろと涙が零れる。

（怖い。でも気持ちいい。蓮にカントを明け渡すのが、こんなに——）

蓮の舌が涙を舐め取った。頬を伝う雫を追いかけるように、ゆっくりと。

「まだ終わってないよ。三ヶ月分って言ったろ」

「……うそ……」

「嘘じゃない。朝までに取り立てるから」

——その夜、湊はカントを蓮に明け渡した。

身体が蓮の所有物だと、カントが先に白旗を上げた。

翌朝、蓮は何事もなかったように出勤していった。

湊はベッドの上で動けなかった。太腿の内側にこびりついた精液が乾いて白くなっている。シーツは使い物にならない。カントの奥が、まだぬるぬると蓮の精液で満ちている。

鍵を変えた。管理会社に電話して、シリンダーごと交換してもらった。これで少なくとも、もう入ってこられない。——はずだった。

夜、シャワーを浴びていた。カントの中を洗い流さなければと、熱い湯を当てて、指で中を探る。蓮の精液がまだ奥に残っていて、ぬるりと指に絡んだ。